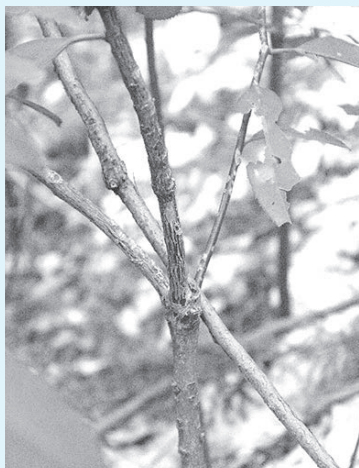


ニホンジカの生息域調査を盆堀の逆沢さかさわでしていたときのことで、シカの食痕のアオキを調べていると、幹肌はアオキのよう(緑色の軸に白っぽい樹皮が斑状についている)ですが、葉が違う木を見つけました。アオキのような柔らかい葉ではなく硬い葉で、細かい鋸歯(葉の縁のギザギザ)があり、手で触れると痛いほどしっかりしている葉でした。普通のアオキの葉にも荒い鋸歯があるのですが、葉自体が柔らかくまったく痛くないので違う葉であるのがわかります。しかし、アオキの葉は変異が大きく、ほとんど鋸歯を持たない個体から大きな鋸歯を持つ個体まで様々です。そして、すぐ近くの今熊山周辺では、大きな鋸歯の個体郡が見られることから、見つけた葉はアオキの葉の変異で、シカの食害に対する防衛本能で葉肉を厚く硬くしたと考えました。

ヒイラギの葉にも大きな鋸歯がトゲ状にあり、シカなどの外敵に葉を食べられないようにトゲのある葉に進化したといわれています。シカの首が届かない高さまで成長すると鋸歯がなくなり丸い葉が出現することからも、外敵による食害などのストレスが鋸歯出現の大きな要因であることが伺えます。ヒイラギの生垣などは剪定を繰り返すと同じようにストレスを感じてトゲのある葉が出続けるため、防犯効果の高い生垣ができるそうです。実際に、逆沢で見つけた新種のアオキもシカの採



食を受けていないことや幹肌がアオキそのものだったことから、疑いを持つことなくアオキの変種だと思ってしまいました。しかし、植物の同定(分類)に詳しい友人にこの葉を見てもらったら、「タラヨウの葉だ」と一言で片付けられてしまいました。タラヨウの自然分布は静岡県以西となっており、温暖な気候を好む種類なので、まったく頭に浮かびませんでした。しかし、逆沢の尾根向こうには広徳寺があり、そこには東京都の文化財に指定されているタラヨウの巨木があります。初冬に赤い実を付け、鳥などが種を運び発芽して育ったと考えられます。目が慣れてくるとアオキの群落の中に、このタラヨウの幼木を3株ほど見つけることができましたが、その範囲は300~400m程でした。不思議なことに、この範囲外では、まだタラヨウの幼木は見つかっていません。(杉野)